

## シネマ游人10号記念号に寄せて

小誌「シネマ游人」は今号で10号を迎え、この区切りの記念号に識者よりコメントをいただきました。身に余る高い評価をお受けする一方、厳しい辛口の指摘もありました。

小誌は日頃から、ごった煮の映画誌とか、映芸の三重県版とか囁かれてきました。しかしこれだけは言えます。いくらハイブローで硬質なものを載せても、読んでもらえなければ意味がありません。読んでもらってナンボということなのです。なので、広く寄稿を募り、品を落とさない程度に（これが難しい）軟らかいものも取り入れてきました。その上で、アンチ・エスタブリッシュメント精神は貫いてきたつもりです。これからも皆さまの協力を得ながら、進化していきたいと考えています。貴重なご意見ありがとうございます。

編集部



## 「創る」ということと映画と同人誌

瀬木直貴

映画監督

故郷の映画同人誌が区切りの十号を迎えたという報が入った。ネットメディアの時代にあつて同人誌という響きが、五十代の僕には何とも懐かしい。仕事柄、マスメディアだけでなく、各地の同人誌やミニコミから取材を受けることは度々あるが、その度に感心するのは同人誌の書き手や編集者の繰る言葉の豊かさ、映画の解釈の多様性である。ネットメディアの皆様には怒られそうだが、紙媒体の方が言葉や文章を大切にしているような気がする。否、ネットと紙では言語体系が異なると言うべきか。

SNSで炎上とは言わないまでも複数の人間から誹謗中傷の言葉を投げかけられたこともある。リテラシーを相応に学んでいるので、僕自身は「うっかり呟く」ことは余りないと思うが、背景を理解せず、一方的に正義を振りかざして来る、想像力と道徳を欠如した投稿には嫌気がさすこともある。ネットメディアの記事を読んでげんなりした気分を、少しでも和らげてくれるのが、僕にとっては今も紙媒体であり、そのトップランナーに「シネマ游人」がある。

実は学生時代、僕も同人誌の編集長だった。その創刊号

で巻頭取材に応じてくれたのが、『風の谷のナウシカ』を劇場公開した宮崎駿監督だった。京都の映画館の狭い控室で、僕は震える声で質問した。作品のテーマ性、地球環境問題に対する考え、押井守監督の『うる星やつら2』と比較した時の共同体の描き方の違いについて等、振り返ると赤面モノのインタビューだったが、宮崎監督は煙草を燻らせながら丁寧に話してくれた。

クリエイターはテーマのために映画をつくっているわけではない。テーマだけに感心があるなら政治家になった方がいい。毎日、見るもの、聞くもの、自分の感性のアンテナにひっかかったものだけが澱のように溜まっていく。溜まり方は多様で、年輪のように積まる場合もあるが、攪拌されて跡形もなくなったり、化学反応が起きる場合もある。が、いずれにしても澱はどんどん溜まっていく。そして、溢れんばかりになった瞬間、一気に吐き出される。それが表現というものだ。感性のアンテナは人それぞれ違うから溜まる澱も人によって違う。だから、テーマありきで映画をつくるのではなく、つくられた映画の中にテーマやメッセージが入っているというのが本当のところだろうと。

目からウロコのあの取材から、三十六年が経った。長い歳月を経てもなお、映画を生業とする僕の原点はここにあ

るような気がしている。新作を公開する度に、多くの記者やリポーターが「作品のテーマは？」「なぜそこに目をつけたのか？」とありきたりな質問を投げかけて来るが、映画とはそんなものでない。日々の暮らしの中での気づきをひとつひとつ拾い上げていく地道な作業がひとつの作品に昇華するのだ。

「シネマ游人」を改めて読んでみて、同人誌も映画と同じような創作過程を辿っているのではないかと感じている。僕の同人誌活動は、大学の卒業と同時にわずか六号で終わった。「シネマ游人」が十号を迎え、若干の悔しさと共に、継続することのご苦労を想う。

## 「シネマ游人」10号、おめでと〜い〜ます

日向寺太郎 映画監督

林久登さんご縁ができ、「シネマ游人」を送っていたいた。監督論、俳優論、新旧の作品論等、多彩な誌面であるが、何よりもそこには映画について語る楽しさと情熱が溢れていた。同好の士が集う祝祭の場である「シネマ游人」に出合えたことを心から嬉しく思う。

## 地方発の映画誌など

藤田明 映画評論家

同人誌と言えば、地方発の文芸同人誌。号を重ねる例もめずらしくないが、読み手を楽しませる編集上の工夫はあまりない。作品を集めて終わりというのものもある。それに比べ、10号に至った「シネマ游人」の場合、編集上の尽力はかなりのもの。まずそれに敬意を表したい。加えてこの際、数項目を挙げておこう。

(1) 東スポとは別に、各人の年間、邦・洋ベスト(3本だけ、5本だけの人も可)を募って選出理由を付けてもらう。国会並みの多数決で〇〇賞と言うのには興味がない。例えば9号の章に伴う・・・のような抜粋の感想でなく、少数派尊重の「旬報」「映芸」の選出理由方式で願いたい。その際には筆者名の下に年齢(ないし20代、40代、70代)を添えること。未知の人が多いわけで。

(2) 斬新な企画を。東京発の映画誌を斬るとか、新聞各紙の映画評(紹介)欄の・・・検討など。

(2) 長田紀生さんの自伝、とまでは行かなくとも、その予告編のような短い連載や、敏八さんの弟さんにも兄の

思い出を少しずつ語ってもらっては？。

(4) これまで知らなかった安井さんや西松さん登場。毎号楽しみであり、いついつまでも続けてほしい。

(5) 森崎東の特集はどうだろう。

―などと来て、以下は地方発の映画誌(紙)と自分のかかわりを振り返ることにした。

地方発の映画誌を知ったのは、1960年前後だろうか。名古屋発の「映画の友」・友の会の支部会誌や、熊本発の「映画手帖」。前者は年一回刊で分厚かった。後者は月刊の32ページ、熊本市内各館の番組や上映作品紹介も詳しい。定価120円前後で各館にも置かれた。

前者はTさん、Mさん、森卓也氏と知り合ったのがきっかけ。年間回顧のベストテンを寄せた際、アルゼンチン映画を1位にし、私の参加しなかった例会でそれが話題になったと耳にした。1961年のフィルムセンターにおける日仏交歓特集へ夜行の準急東海で駆けつけ、午前10時の上映に向けて朝からの行列へ並びながら語り合ったのもその面々だった。

後者は藤川治水氏との出会いから。「映画評論」で名を知り、東京での全国教研・分科会のあと話せたのが最初。次

は金達寿や上田正昭らと九州の装飾古墳をめぐって熊本一泊の折、自宅に赴く。三度目は修学旅行の付き添いで熊本泊の際、ホテルへ来てくださった。作品評など何度も寄稿したが、中で記憶する一つは、篠田正浩「少年時代」。学童疎開の体験を持つ身には違和感もあって批判した。藤川氏の一番の仕事は地方発の映画書に関して。その全国への目配りは他に例がない。新聞活字を使った56年創刊の小型誌、治水さん亡くなって以降も続いたのだろうか。地元の執筆陣は熊大の講座へも進出し、それぞれの内容を一冊本にまとめるなど、九州男児の意気を發揮していた。

のち雑誌「シナリオ」の地方映画論特集に私も参加したが、その由来は両誌ということになる。

映画紙関係を挟んでおこう。先輩格は「旬報」が戦後すぐに毎月、発行していた「スクリーン&ステージ」。「旬報」ベスト10とは別に、芸術に絞った選者によるベスト10で、例えば、北川冬彦の場合、邦画テンは「旬報」で見られたが、洋画テンはこのタブロイド紙に載って、イタリア映画ネオリアリズムへの高い評価を知った。小遣いもない高校生、本屋でそっと1、2分めくるしかなかった頃である。

鈴鹿の「人間映画」はA4裏表1枚程度の映画紙。清水

信による隔月刊だが、個人誌ならぬ個人紙であった。例えば57年の私的ベスト10は、『幕末太陽傳』が1位。『米』1位の「旬報」より先んじたセンス。60年の近代文学賞で一気に文学へ傾斜したのは仕方ないにしても、主に地元で年間200本近く見ていたことも、紙面からうかがえる。

協業の映画紙の代表例は大阪発の「映画新聞」。創刊は1984年。隔月号のタブロイド判8ページ。90年代に私はしばしば寄稿した。劇場で一般公開されるようになる以前から毎年、大都市を中心に中国映画祭が当時は催されており、その辺の作品が中心で、L・アンダスン特集上映に關しても記した。99年に休刊したが、編集陣のうち景山理さんはシネ・ヌーヴォへ、倉田剛さんは山形ドキュメンタリー祭、本、市川準本などに、その後は向かった。新聞とはいえ、映画誌以上の実質が何よりで、全3巻の合本など後世に残ることだろう。

それらへ時に寄稿したわけだが、連載の方は、津のシネマフレンズの例会用4ページパンフに毎号。FAX以前であり、主宰の谷口さんへ手渡していたのを思い出す。津でもう一方の優秀映画鑑賞会は、主宰・水谷氏のワンマン風の情報記事だった。現在は伊勢新聞と全国小津ネットの季刊レターに連載している。

映画誌へ戻るなら、埼玉の「NEW・映画と私」は50ページ近い年刊誌。休刊に至ったようだが、例えば手元にある15号(2012年)の特集は「映画の中のエロス」。自由投稿は認めず、レベルの高い同人誌といった感。名古屋で毎月、寄る少人数の映画仲間から存在を知らされた(昨今はその会にも欠席がちだが)。

神戸映サのメンバーによる一誌も見逃せない。左派の目で山田洋次批判を展開した塩見正道の論など記憶される(米長寿さんの紹介だったが、氏との交流は拙著を読んだという連絡で再開に至った。若い頃、神戸で知り合った一人。昨春、亡くなった)。

このようにたどると、「シネマ游人」の存在位置も浮上してくる。自虐めくが、三重映画フェスも、彼岸花映画祭も映画誌とは無縁で来た。あるいは松坂や飯高も全てイベント中心で、研究や刊行にさほど意を注いでこなかったと言えよう。東海地方を眺めわたしても、年2回刊行出来た例は他にどうなのか。意義は確実にあったわけだ。

昨年、東京の国立映画アーカイブにおける映画誌展へ赴いたが、戦前の地方発の映画誌も若干、展示されていて感慨を抱く。「シネマ游人」も長く続けば光を放つに違いないだろうとの…。

## 映画否定論を

安井廣之 クリニック院長

「シネマ游人」の内容が第7号ぐらいからパターン化してきたように思います。ジューさんの好事家が、車座になって真面目くさった話をする。孫の自慢話だったら聴いちやいられません。映画の話だから許される。みんな知り合いだし、遠慮もあるから、内容が変だとか月並みだと思っても異議を差し挟まない。どうせ好き者の集まりだし、世間様に迷惑をかけてるわけでもありませんから「まー、いっつか」といったところですね。こういうのを、「マンネリ」と言うんじゃないんですか。

「シネマ游人」は塀の中で仲間ごっこをしていますが。禿げ頭にドカンと一発食らわせないと、変化は訪れません。車座は車座でも、外向きの車座じゃないと読者の皆さんはこちらを向いてはくれません。皆さんのお書きになる映画の紹介や批評はそれなりに質が高く、悪い文章ではないと思います。だけど、現状肯定的で、破壊性がありません。今まであったものを壊し、新しいものを創るのが芸術です。お前にそんなことを言う資格があるのか、と言われそうです。あった、とは言うことができます。学生運動で処分を食らってプータロー。フランス語を勉強し、仏政府の

留学生試験に合格してリヨン大学留学。帰国後医者をやめてインド放浪一年半。その後また医者に戻りましたが、新たな可能性を求めて、四三歳で外資系の会社に就職、ビジネスマンになりました。五〇歳で医学を再勉強、六一歳で四日市に戻って開業医をやっています。七八歳ですからもうじきこの世も終わりですが、ぶち壊しの人生でした。芸術家になれなかったことは認めざるをえません。：

「シネマ游人」の次号は映画否定論特集でどうですか。

## 祝 シネマ游人5年10号

吉村英夫 映画評論家

まず私事から。高校卒業時に同級生と活版三〇ページほどの同人誌を出した。最初で最後、約一ヶ月二百時間余、ひとりで活字を拾った。父親の後を継いで文選工になろうかとの思いがよぎった。：小説、詩、評論、雑文。自分の書いた文章が印刷された。各人、好みの一致もなければ目標もなかった。誌名については同人十余人が紙一枚にひらがなを一字書いて、それを空にばらまいた。一番遠く飛んだところから三枚を集めた。結果は「さ・ふ・う」。お遊びだった。書いた者の個性が違い、世界は自分中心にまわっ

ていないことを知った。だが「創刊」が「終刊号」となった。われら青春の形見。

数十年も経て「シネマ游人」に出会い、なんとなく寄稿するハメになり五年余。いま眺めていると、映画という「好みの一致」はあるが、明確な「目標がない」点で、わが十九歳の形見に似る。同床異夢というのか、おとなが十人寄れば、数だけの好みがあり、思想信条も違う。映画観も異なる。小誌は、書きたい放題で硬軟とりどり、論争も異見のやりとりもない。みなさん！我が道を行けばよい。

二一世紀の人類は、コロナ論議も含めて、異見ばかりで衝突を続けている。このままでは、地球という星は、もう長くないかも。いや、大丈夫。書きたい放題で、異見はあっても争わないで平和共存の「シネマ游人」方式でいけば、世界は、案外長持ちするかも。誰にも期待されず、恐れられず、苦にもされず、微少の微少で、独立独歩がよい。寄せ集まりは、案外、長持ちするのもかも。金策は寄稿者から応分に。硬軟取り混ぜて、自由気ままに映画のことを書き続けられよい。